

現代物理学とユング心理学の接点

～暗在系と集合的無意識～

江角 弘道・飯塚 雄一

概 要

近代科学は物質世界の解明に成功した。人類は、その応用により科学文明社会を20世紀に出現させ、現在に至っている。その一方で、近代科学は、精神世界の現象の多くについて解明せずに見過ごしてきた。ところが、現代物理学では、その見過ごしてきた精神世界に関与する現象を見過ごすことができなくなったのである。ここでは、現代物理学からでた仮説である“Bohmの暗在系”が、精神世界を解明する心理学から出た仮説の“ユングの集合的無意識”と類似していることについて考察する。さらに、それらはホリスティック医学における“生命場”とも対応していることを考察する。

キーワード：暗在系，集合的無意識，電磁場，現代物理学，ユング心理学

I. はじめに

近代科学は、人類の物質文明の発展に大きく貢献した。その近代科学の指導原理は、三点ある。第一点目は、再現性である。再現性は「だが、いつ実施しても同じことができる。」ということである。第二点目は、普遍性である。これは「日本でもできるし、アメリカでもヨーロッパでも東南アジアでもできる。」というように、民族などに無関係で共有できることである。第三点目は、客観性である。これは、人の思いとか好みなどの主観を交えず、論理的な説明ができるということである。この三つの指導原理こそが、近代科学を成功に結びつけた原動力であった。また、近代科学の方法論は、「分析と総合」である（佐古, 1997）。これは、どんな複雑なものでも細かく分ければ単純な要素になり、その要素を集めれば全体が復元できるという考え方である。これは、「要素還元主義」ともいう。

近代科学が物質世界の説明に、あまりにうまく行きすぎたがために、それを最高の指導原理のごとくほとんどの科学者が思っている。しかしながら、この原則を厳しく守るために、落と

さざるを、えなかった現象が少なからずある。再現性の取りにくいもの、普遍的でないもの、客観的に説明のつきがたいもの、こういうものは、芸術などまさにそうであるが、科学の対象から外されてきたわけである。特に、人の心や意識が関与する現象（潜在意識や無意識層の働き、感性や感動の源泉）などの精神世界の現象の多くは、科学されずに見過ごされてきた。科学は、それを説明する原理を持ち合わせていなかったのである。ところが、現代物理学の二大理論の一つである量子力学の世界では、意識に関与する問題が出てきたのである。量子力学は、原子の内部の素粒子の振舞いを記述する理論である。粒子のサイズが小さくなって、電子のレベルになると、我々の常識が全く役に立たなくなる。例えば、壁に二個の穴を開けて、一個の電子を飛ばすと、その電子は、同時に二カ所の穴を通過することが観測される。（常識では、電子は粒子であると考えれば、どちらか一カ所の穴を通過するはずである。その常識がくつがえされた。）つまり、電子は、あるときは「粒子」のように、あるときは「波」のように振舞うのである。量子力学は、この状態を波動関数で、確率統計論的に取り扱う。そこでは、近代科学の常識である因果律が成立しなく、確率的

にしか断定できなくなつたのである。電子は、客観的な実在としてあるのではなく、常に一つの運動の「状態」としてある。電子は、観測するものと観測されるものという関係の中でのみ存在する。すなわち観測する主体と、観測される客体とが、両者の関係の中で成立するという不思議な世界である。そこで、観測すると言う場合には、意識を持つ人間がいて観測できるわけであるから、物理学の世界に意識が関与する現象が出現したわけである（天外，2000）。物理学の中で、場と言う概念がある。物理学は、基本的なところでは「場の理論」であるともいえる。素粒子を扱うには、量子場の理論が用いられている。Bohm(1986)は、観測問題を考えるのに、物理学の場という概念をさらに発展させて、「暗在系」という概念を提唱した。

一方、精神世界の中で、意識に関する現象を扱う心理学は、フロイトやユングが大きく発展させた。深層心理学者のユングは、意識の下には、個人を超えた『集合的無意識』の世界があると述べている。無意識の表面的な層は、個人的である。それは、個人的無意識と呼ばれる。集合的無意識は、さらに深い層に根ざしていて、もはや個人的に経験され獲得されたものではなく、生得的なものである。このより深い層が、集合的無意識である。

この報告では、物質世界の概念である「暗在系」が、精神世界の概念である集合的無意識の概念と類似していることについて考察する。

II. 物理学における場の概念

場とは目に見えないものである。ものなどを持ってきたときに作用するものである。だからエネルギーに充ち満ちているところである。ここでは、電磁場を例に説明する。現代は、テレビ、ラジオ、パソコンなどの生活に使われるもの、自動車、飛行機などの乗り物、医療関係の検査装置など非常に多くのもので、電磁場が利用され、その恩恵を受けている。

最近では、ほとんどの人が携帯電話を持つようになってきた。この携帯電話は、電磁波が届く範囲内であればどこからでも話ができる。これは、ある人が友人に携帯電話をかければ、空間

を電磁波が飛び回って、離れた場所にいるその友人の携帯電話に電磁波が届き、会話ができるためである。この携帯電話は、物理学の中で明らかにされた電磁場に関する現象を応用したものである。電磁波はエネルギーを持った波である。それは、あらゆる空間を伝搬してゆく。電磁波が伝搬している空間を電磁場という。マックスウェルは、1864年に電磁場に関する基本方程式を確立して、その方程式を解き、電磁波が真空中を光の速度で伝搬することを予言した。それから20数年たち、1888年、ヘルツがこれを実証した。物理学は、この電磁波という実在を見いだした後、大きく発展した。

電磁波は、空間全体に広がって分布している。電磁波が届く範囲（物質で吸収されて消滅するまでの範囲）内であれば、どこにいても電磁波検知機（今の場合は、携帯電話）さえあれば、感知できる。だから空間のある部分では、別の人の音声聞こえるのではなく、発信者の音声は、空間のどの部分にいても同じに聞こえる。

携帯電話の場合は、音声を電磁波に載せるものである。また、携帯テレビ電話は、音声と画像を同時に電磁波に載せるものである。従って、携帯テレビ電話を持っているもの同士の会話を考えると、2人の音声と画像が、この広大な空間を電磁波として行き交っていることになる。さらに、「携帯テレビ電話の音声と画像」は、「電磁場」と1対1に対応している。つまり、電磁場がなければ、携帯テレビ電話の音声は聞こえず、画像も映らない。その携帯テレビ電話の音声と画像は、広大な空間に分布する電磁場のどこか部分に存在するのでなく、空間にある電磁場の中に、渾然一体となって「たたみ込まれ」ているという特徴がある。ある場所で、受信すれば音声と画像がその場所で現れてくる。

従って、場とは目に見えないものである。それを感知するものを持ってきたときにそれに作用するものである。場は、だからエネルギーに充ちている空間である。

III. Bohm(1986)の提唱した「暗在系」

現代物理学の最先端は、素粒子物理学である。素粒子は、シュレディンガーの波動方程式で、

記述できる。そこでは、素粒子を観測していないときは、複素数であって、観測したときには、実数（絶対値）で考えるということが前提になっている。この「観測」に対する「量子力学の解釈問題」については、いまだ解決されていない。そのため観測したときのみを問題にする「コペンハーゲン解釈」があり、現代の物理学者の95%ぐらいは、それを信奉している。一方で、観測しないときも、観測したときも全体を考慮すべきであるとする物理学者もいる。その中の一人Bohm(1986)は、「素粒子は、観測しているときも、観測していないときも存在し、その素粒子により作られたエネルギーの場が全宇宙に広がっている。」と考え、「ホログラフィ宇宙モデル」を提唱した。これは、物質の世界と精神の世界の問題を統一的に扱おうとした最初の本格的な仮説である。

ホログラフィ (holography) という技術は1948年に、物理学者デニス・ガボールによって発明された。ホログラフィは、ギリシャ語の「すべて、全体」を意味する「holos ホロス」と「写法、画法、記述する方法」を意味する「graphy グラフィー」の合成語であり、「光の空間的情報のすべてが記録されたもの」を意味する、いわゆる「立体写真」である。ホログラフィ技術で作成したものを「ホログラム」という。普通の写真であれば、その写真を細かく切り刻んで行けば、その破片で全体像は見ることができないが、ホログラムフィルムは細分化しても、その破片にレーザー光線を当てると、被写体の立体的な全体像が浮かび上がる。つまり、ホログラムにはどんな細かな部分にも三次元空間にある被写体の全情報が記録されている。現在使用されている一万円札と五千円札の左下には、偽造防止のためのホログラムが貼り付けてある。

Bohm (1986)は、相対性理論と量子論をその根本的なところから矛盾なく共通理解するために思索し、ホログラムのアナロジーを使って、「この世界には直接見ることのできない『暗在系 enfolded order 又は implicate order』が存在しており、宇宙の全情報、それも宇宙創世から未来永劫までの全情報がインプットされている」とした。そして、この『暗在系』に対して、

光線を照射することによって浮かび上がるホログラムの立体像のように、「ホロムーブメント (holomovement)」によって直接見ることができ『明在系 unfolded order 又は explicate order』がある。」と仮説をたてた。Bohm (1986)は、「明在系」すなわち人間が観測できる宇宙の秩序、時間、空間などは、「暗在系」の一つの写影であり、「暗在系」には、宇宙のすべての物質、精神、時間などが全体として、たたみ込まれており、分割できないものであると考えたのである。

Bohm (1986)の説によると、宇宙空間も銀河の星もこの地球も、そしてこの私という存在も、一枚の織物の如く暗在系では密接につながっていることになる。距離のある二つの素粒子も、出雲にいる猫と東京にいる猫も、日本にいる白鳥もイギリスにいる白鳥も、夜空に輝く無数の星とそれを眺める私も暗在系では一つのもと考えられる (江角, 2007)。

IV. ユング心理学における集合的無意識の概念

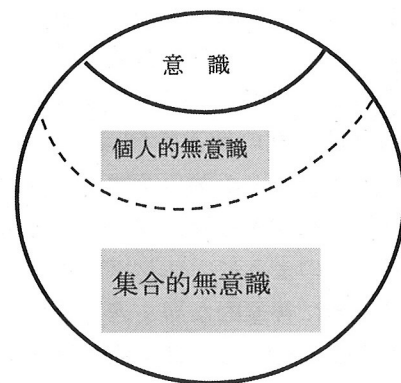


図1 人間の心の中の意識と無意識の関係

「コロンブスがアメリカ大陸を発見した」と言われるように、フロイトによって無意識が発見された。しかし、無意識というものは、古代にすでに原始精神療法として、実践的に生かされていた (エレンベルガー, 1980)。フロイトは、人間の心の中を大きく意識と無意識に区分している。ユングは、無意識の研究を続けるうちに、さらに深い層があると考えた。つまりユングは心の構造を、図1に示すように、意識、個人的無意識、集合的無意識の3層からなると考えた。意識というのは、自分で認識できる心

である。個人的無意識というのは、個人の経験から生まれた自分では意識できない心である。それは、①自然に忘れ去られた意識内容、②意識が抑圧した内容（コンプレックス）、③意識されない感覚的な痕跡の内容などからなる。集合的無意識というのは、人類全体が共有する普遍的な心である。ユングが、集合的無意識をいいた根拠は、①精神病患者の妄想と、古来からある神話や宗教のイメージと類似性、②深い夢を見た場合、同様な類似性を発見できる。③世界各地に存在する神話の類似性、などである（河合、1967）。河合（1967）は、次のような実際的な例を挙げている。中学2年男子の学校恐怖症の生徒が、3回目の面接で、次のような夢を語る。「自分の背の高さよりも高いクローバーが茂っている中を歩いていく。すると、大きい大きい肉の渦があり、それに巻き込まれそうになり、恐ろしくなって目が覚める。」この夢について、この少年はほとんど何も思いつづことがなかったといい、この夢の内容は、この人の意識からはるかに遠い、深い層から浮かび上がってきたとしか考えられない。このような深淵は多く残りの神話において、重い役割を演じている。すでに全人類に共通のイメージとして現れるものであるという。この少年の夢に、生じた内容は、彼の個人的経験としてよりも、神話的なモチーフとの強い連関性を持ち、全人類に普遍的に存在する層に属しているものと考えられる。このように、ユングは人間の意識の奥深く、人類に普遍的な層を考えている。この集合的無意識の内容は、神話的なモチーフや形象から成り立っているが、この内容は、神話やおとぎ話、夢、精神病患者の妄想、未開人の心性などに共通に認められる。そして人間の普遍的無意識の内容の表現の中に共通した基本的な形を生み出すことができると考え、ユングはそれを元型と呼んだ。このように、精神の世界を見ると、意識の下には、個人を超えた『集合的無意識』などの世界があり、そこでの情報の海を母胎にして、共時性等の現象が現代科学の因果律とは別の法則性の下に生起している。

V. 暗在系の概念と集合的無意識の概念の接点

ホログラムフィルムを細分化し、その断片のフィルムにレーザー光線を当てると、全体の像が映し出される。これは、部分の中に全体の情報が内包されていることを示す。Bohm (1986)の「ホログラフィ宇宙モデル」によれば、同じようにこの宇宙のどの部分にも宇宙全体の情報が内包されている場がある。このような場を「暗在系」という。そしてホロムーブメントによって、目に見える「明在系」に移ることが出来る。これは、電磁場のどの空間にも、全体像（携帯テレビ電話の例では、音声と映像となる。）がたたみ込まれていることに対応し、ある場所で、電磁波感知器のスイッチを入れれば、そこで全体像が現れることと対応している。

一方、ユングは、「人間の集合的無意識は、個人に所属するものでなく、全人類に共通であり、つながっている存在である。」と述べている（山中、1999）。従って、人の心の中に全人類共通の無意識の場があることになる。その集合的無意識の場は、絵画（曼陀羅を含む）や夢そして箱庭などを通して意識的な世界に現れるのである（河合、1967）。

これらより、人が知覚できる「意識層」の奥底に、通常の状態ではまったく知覚できず、その存在すらわからない「無意識層」が隠れている。同様に、目に見える物質的な宇宙の背後に、目に見えない、われわれが存在を知ることができない宇宙すなわち「暗在系」が隠れている。さらに、「無意識」の世界はひとつで、すべての人によって共有されている。したがって、すべての人がつながっており、分離できない。同様に「暗在系」には、すべての物体、生物が全体としてたたみ込まれており、分離できない（天外、1997）。従って、ボームの仮定した暗在系とユングの集合的無意識は、「あらゆる存在がそれぞれ相互に依存しあい、繋がって成立している場」のように考えられる点で接点があると言える。天外（1997）は、2つの全く違う世界から出た仮説—心理学から出た仮説（ユングの集合的無意識）と現代物理学から出た仮説（Bohmの暗在系）—の類似性は、実は同じ内

容を異なる角度から記述していると指摘している。

一方、帯津（1997）は、「21世紀の医療は、場の医療になる。」と言い、次のように述べている。場の医学は、ホリスティック医学と言い、人間の細部を分解してとらえる近代西洋医学と異なり、身体全体を見る医学のことである。現在の医学で場を対象とするものとしては、東洋の伝統医学、心の医学があり、西洋医学の中の免疫学が場を見始めている。この場は、“私”という皮膚によって閉ざされた空間でなく、広く外部の場とつながっている。自分の身体の中には、「生命場」があり、自然治癒力とは、場を秩序性の高い方向に動かそうという力である。地球は、ひとり一人が構成員であるので、各人が自分の場を整えれば、地球の場も整ってくる。逆に地球の場が整ってくると、個人の場も整ってくることになる。場は物理的な存在なので、生成消滅はせず、“私”という場は宇宙開闢より存在し、ここに来て生を受けて肉体という衣服を纏っている。故に、肉体は滅びても場は残ると考えられる。

この生命場と言う概念は、これまで述べてきた暗在系とも集合的無意識とも類似していると考えられる。図2に上記の関係を示す。

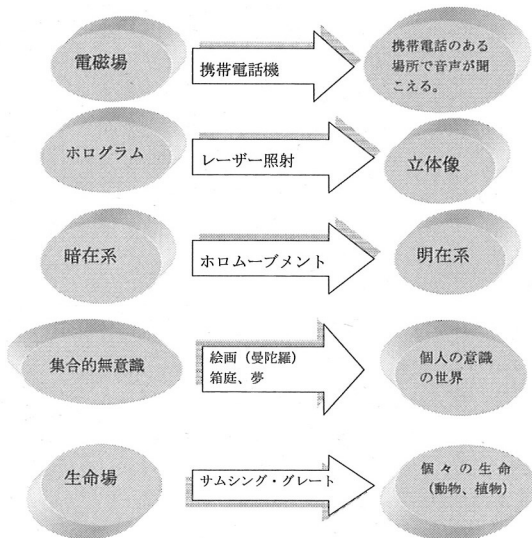


図2 「見えない世界」と「現象して現れた世界」の関係性

Ⅵ. ま と め

近代科学が物質世界の解明に成功し、その恩恵を受けた科学文明社会が20世紀に出現し、現在に至っている。その一方で、精神世界の現象の多くは、科学されずに見過ごされてきた。ところが、現代物理学では、その見過ごしてきた精神世界に關与する現象を見過ごすことができなくなった。その問題を解明するための現代物理学からでた仮説である“Bohmの暗在系”と、精神世界を解明する心理学から出た仮説の“ユングの集合的無意識”は、「あらゆる存在がそれぞれ相互に依って成立している場」と考えられる点で接点がある。さらに、それはホリスティック医学における“生命場”とも対応していることを示した。ここで、比較したことは、さらに深く思索されるべきものである。

文 献

- 江角弘道（2007）：宇宙はどこにあるか～ホログラムと「一即一切，一切即一」～，春秋，488，15-18.
- エレンベルガー，A（1980）：木村敏・中井久夫（監訳），無意識の発見，2-8，弘文堂，東京.
- 帯津良一（1997）：船井幸雄編 意識・ホリズム・新エネルギー（初版），54-66，ビジネス社，東京.
- 河合隼雄（1967）：ユング心理学入門（初版），89-95，培風館，東京.
- 佐古曜一郎（1997）：船井幸雄編 意識・ホリズム・新エネルギー（初版），26-28，ビジネス社，東京.
- 天外伺朗，佐治春夫（2000）：宇宙のゆらぎ・人生のフラクタル，106-131，PHP研究所，東京.
- 天外伺朗（1997）：般若心経の科学－「256文字」の中に，「21世紀の科学を見た－，209-220，祥伝社（初版），東京.
- Bohm, David J. (1986) :A New Theory of the Relationship of Mind and Matter, The Journal of the American society for

psychical research, 80(2), 113-135.

山中 康裕 (1999) : 臨床ユング心理学入門
(初版), 31-98, P H P 研究所, 東京.

現代物理学とユング心理学の接点～暗在系と集合的無意識～

**The Connection between Modern Physics
and Jung's Psychology :
The Implicate Order and The Collective
Unconsciousness**

Hikomichi EZUMI and Yuichi IZUKA

Key Words and Phrases: implicate order, collective unconsciousness, electromagnetic field, modern physics, Jung's psychology

『島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要』投稿規定

1. 投稿者の資格

紀要への投稿者は、著者または共著者の一人が本学の専任教員であること。
ただし、メディア・図書委員会が認めた者はこの限りでない。

2. 投稿論文の内容は、国内外を問わず他誌での発表あるいは投稿中でないものに限る。

3. 論文は、和文または英文とする。

4. 原稿の種類

原稿の種類は、〔総説〕、〔原著〕、〔報告〕、〔その他〕であり、それぞれの内容は下記のとおりである。

〔総説〕それぞれの専門分野に関わる特定のテーマについて内外の知見を多面的に集め、また文献をレビューして、当該テーマについて総合的に学問的状況を概説し、考察したもの。

〔原著〕研究が独創的で、オリジナルなデータ、資料に基づいて得られた知見や理解が示されており、目的、方法、結果、考察、結論等が明確に論述されているもの。

〔報告〕内容的に原著論文には及ばないが、その専門分野の発展に寄与すると認められるもの。

〔その他〕担当授業科目等に関する教育方法の実践事例などの報告、または、それぞれの専門分野の研究に関する見解等で、メディア・図書委員会が適当と認めたもの。

5. 倫理的配慮

人および動物を対象とする研究においては、倫理的に配慮され、その旨が本文中に明記されていること。

6. 原稿の執筆要領

原稿は原則ワードプロセッサで作成し、和文・英文ともにA4版の用紙に印刷する。

1) 原稿の書式

(1) 和文：横書きで1行を全角で21字、1頁41行とする。図表を含め24枚以内

(2) 英文：半角で84字、1頁41行、図表を含め12枚以内とする。

なお、和文の場合は原稿2枚が仕上がり1頁に、英文の場合は原稿1枚が仕上がり1頁に相当する。

2) 原稿の構成

(1) 和文原稿

① 表題 : 表題が2行にわたる場合、いずれの行もセンタリングする。

② 著者名 : 本学以外の著者の所属は、*印をつけて1頁目の脚注に記す。

③ 概要 : 300字以内の和文概要をつける。

④ キーワード: 和文で5個以内とする。

⑤ 本文

⑥ 文献 (引用文献のみ記載する)

⑦ 英文表題: 英文表題からはページを新しくし、各単語の1文字目は大文字とする
(例: The Role of Practitioners in Mental Health Care)

⑧ 英文著者名: 英文著者名は最初の文字のみ大文字、姓は全て大文字にして2文字目

以降に赤色でスモールキャピタルの字体指定(二重下線)をする。

(例: Hanako IZUMO)

和文・英文著者名の共著の場合、著者と著者の間には中点を入れる。

本学以外の著者の所属は、Key Words and Phrases の次1行あけて脚注に*印をつけて所属の英語表記をする。

例: Key Words and Phrases

* Shimane University

⑨ 英文概要: [原 著] には、150語以内の英文概要をつける。見出しは赤色でゴシック体の指定(波線の下線)をし、センタリングする。Abstract

⑩ 英文キーワード&フレーズ: 概要から1行あけて5個以内。見出しは赤色でゴシック体の指定(波線の下線)をする。Key Words and Phrases:

(2) 英文原稿

① 表 題 : 表題が2行にわたる場合、いずれの行もセンタリングする。

② 著者名 : 本学以外の著者の所属は、*印をつけて1頁目の脚注に英語表記する。

③ Abstract: 150語以内

④ Key Words and Phrases: 1行あけて5個以内

⑤ 本 文

⑥ 文 献

(3) 図表および写真

図と写真はそのまま印刷可能な白黒印刷のもの。印刷が明瞭なものに限る。

図や写真は、図1、表1、写真1等の通し番号をつけ、本文とは別用紙に一括して印刷する。図・写真の番号やタイトルはその下に記入し、表の番号やタイトルはその上に記入する。なお、図、写真、表などの挿入位置がよくわかるように本文原稿右欄外にそれぞれの挿入希望位置を朱書きで指定しておく。

3) その他の注意事項

(1) 外国人名、地名、化学物質名などは原綴を用いるが、一般化したものはカタカナを用いてもよい。

(2) 省略形を用いる場合は、専門外の読者に理解できるよう留意する。論文の表題や概要の中では省略形を用いない。標準的な測定単位以外は、本文中に初めて省略形を用いるとき、省略形の前にそれが示す用語の元の形を必ず記す。

(3) 本文の項目分けの数字と記号は、原則として、I, 1, 1), (1), ①, a, a) の順にするが、各専門分野の慣用に従うことができる。

(4) イタリック体、ゴシック体などの字体指定は、校正記号に従って朱書きしておく。

(5) 学内の特別研究費、文部科学省科学研究費などによる研究を掲載する場合は、その旨を1頁目の脚注に記載する。

(6) 本文内の句読点は、「。」と「,」を使用する。

(7) 和文原稿の英文表題と〔原著〕の英文概要、及び英文原稿の英文は、著者の責任において語学的に誤りのないようにして提出すること。

4) 文献の記載方法

(1) 引用文献については、本文中に著者名(姓のみ)、発行年次を括弧表示する。

(例) (出雲, 2002)

(2) 文献は和文・英文問わず、著者の姓のアルファベット順に列記し、共著の場合は著者全員を記載する。

(3) 1つの文献について2行目からは2字(全角)下げて記載する。

① [雑誌]

著者名(西暦発行年): 表題名, 雑誌名(省略せずに記載), 巻数(号数), 引用箇所の初頁-終頁.

(例) 出雲花子, 西林木歌子, 北山温子(1998): 看護教育における諸問題, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 3, 14-25.

② [単行本]

著者名(西暦発行年): 書名(版数), 引用箇所の初頁-終頁, 出版社名, 発行地.

(例) 島根太郎(1997): 看護学概論(第3版), 70-71, 日本出版, 東京.

③ [翻訳書]

原著者名(原書の西暦発行年): 原書名, 発行所, 発行地/訳者名(翻訳書の西暦発行年): 翻訳書の書名(版数), 頁, 出版社名, 発行地.

(例) Brown, M. (1995): Fundamentals of Nursing, Apple, New York./出雲太郎(1997): 看護学の基礎, 25, 日本出版, 東京.

④ [電子文献の場合]

著者名(西暦発行年): タイトル, 電子文献閲覧日, アドレス

(例) ABC看護技術協会(2004): ABC看護実践マニュアル, 2004-06-07,
<http://www.abc.nurse.org/journal/manual.html>

7. 投稿手続き

- 1) 投稿原稿は、複写を含めて3部提出する。原稿右肩上部に、原稿の種類を明記しておく。ただし、1部のみ著者と所属名を記載し、その他の2部については著者名と所属名は削除しておく。
- 2) 投稿原稿を入力したフロッピーディスクまたはCD-ROMには、①氏名 ②連絡先電話番号 ③使用した入力ソフトおよび文書ファイル保存形式、を記載し、査読終了後に最終原稿とあわせて提出する。

8. 原稿提出

投稿原稿は、メディア・図書委員会が定めた期限内に、完成原稿を図書館事務室に提出する。

9. 原稿の採否

投稿原稿について、メディア・図書委員会が依頼した者が査読を行なう。査読後、メディア・図書委員会が原稿の採否等を決定する。査読の結果により、メディア・図書委員会が原稿の修正を求めることがある。

10. 校正

印刷に関する校正は原則として2校までとし、著者の責任において行う。校正時における大幅な加筆・修正は認めない。校正にあたっては校正記号を使用する。

11. 掲載料

執筆要領に定める制限範囲内の本文、図、表について掲載料は徴収しない。別刷は30部まで無料とする。特別な費用等を必要とした場合は、著者が負担する。

12. 公表

掲載論文は、本学が委託する機関によって電子化し、インターネットを介して学外に公表することができるものとする。なお、著者が電子化を希望しない時は、投稿時にメディア・図書委員会へ申し出ることとする。

編 集 後 記

平成19年4月、島根県立3大学の統合法人化により、島根県立看護短期大学は、公立大学法人 島根県立大学短期大学部出雲キャンパスとなりました。それに伴い、『島根県立看護短期大学紀要』も『島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要』と名称を改めました。メディア・図書委員会が編集作業を担当し、原稿の査読は講師以上の全教員にお願いしました。査読作業にご協力いただいた方々には、厚く御礼申し上げます。

最後に、『島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要』が、本キャンパス教員の日頃の研究成果を発表する場として今後さらに発展していくことを願っています。 (田中)

島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要 第1巻 2007

2007年12月10日発行

発行所: 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス

(編集: メディア・図書委員会)

住 所 〒693-8550 島根県出雲市西林木町151

TEL (0853) 20-0200 (代)

FAX (0853) 20-0201

URL <http://www.u-shimane.ac.jp>

印刷所: 千鳥印刷株式会社

住 所 〒690-0876 島根県松江市黒田町484-15

TEL (0852) 21-7155 FAX (0852) 27-6917

Bulletin
of
The University of Shimane Junior College
Izumo Campus
V o l . 1 2 0 0 7

CONTENTS

(Original Articles)

Relationship between Oral Health and General Health in the Elderly People Ayako MATSUOKA and Kazuya YAMASHITA	1
Verbal and Nonverbal Modality Effects on Impressions of Political Candidates Yuichi IZUKA , Miles L. PATTERSON, John TELLOYAN Mark E. TUBBS and Miyoko MISHIMA	9

(Reports)

Influence of Urinary Incontinence on Quality of Life in Community-Dwelling Elderly Women Chiaki INOUE, Reiko NAGASHIMA, Ichie MATSUMOTO and Kazuya YAMASHITA	17
Leisure Activities and Cognitive Function in Community-Dwelling Elders Kazuya YAMASHITA, Yuri IYAMA, Ichie MATSUMOTO, Chiaki INOUE Ayako MATSUOKA, Yumi ISOMURA, Momoko ITSUKA, Miyuki KAJITANI Minae AGO, Shigeko SAITO, Yoichiro FUKUZAWA, Masanori KATAKURA Michio HASHIMOTO, Setsushi KATO	25
Effectiveness of Reminiscence and Autobiography in the Community-Dwelling Elderly Who Suffered from Forgetfulness Yuri IYAMA, Kazuya YAMASHITA, Maki KATO and Yumi ISOMURA	31
Ideal Way of Community Health Nurse Basic Education that Community Health Nursing Practice Leader Needs Mikiko ODA, Shigeko SAITO, Tomoko OGAWA and Naomi NAGAE	39
Study on Support of the Aged Empowerment Living in Special Nursing Homes of the Aged: Change in the Relation to the Society between Before and After Reception Tomoko ITO, Maki KATO, Miyuki KAJITANI, Sayuri TSUNEMATSU Nozomu MOROI and Masashi KANETSUKI	51
The Meaning of Simulated Patients Who Have Experienced as a Nurse on Preclinical Lessons: Analysis of SP's Feedback Yoko YOSHIKAWA, Ichie MATSUMOTO, Ayako MATSUOKA, Masako NAGASAKI Fumie BESSHO, Satoko AIKA, Yuri IYAMA and Chiaki INOUE	59
Nursing Student's Learning from Cancer Survivor's Story of "Live with Illness" Fumiko HIRANO, Satoko AIKA and Fumie BESSHO	67
A Comparison of Death Concern in Nursing Students Masako NAGASAKI, Ayako MATSUOKA and Kazuya YAMASHITA	75
An Endeavor toward Making Nursing Research Design by Using Label Work Technique in Nursing Fundamentals Miyuki KAJITANI, Teruko ISHIBASHI, Reiko NAGASHIMA, Emiko TAKAHASHI Kenji HAYASHI, Momoko ITSUKA and Chiaki INOUE	83
An Approach to Communication Skill Training Using Label Work Technique Momoko ITSUKA and Teruko ISHIBASHI	93
Linguistic and Cultural Aspects of English Brand Names Yoshifumi TANAKA and Yuki TAKENAKA	101

(Others)

An Attempt at Death Education Using a Nursery Song and a Picture Book Hiromichi EZUMI, Yuichi IZUKA, Yuri IYAMA and Momoko ITSUKA	111
An Attempt at e-Learning of Nursing Education by Using Mobile-Phone Minae AGO, Teruko ISHIBASHI, Miyuki KAJITANI, Isao SAKAMOTO, Yuichi IZUKA Toshihiro KANETSUKI, Kazuya YAMASHITA, Masahiro YANASE, Shigeyuki SEKIGUCHI Toshiaki MATSUO and Yutaka AKAKI	121
A Significance and a Problem of Collaborative Lectures by Using the Label Work Minae AGO, Teruko ISHIBASHI, Miyuki KAJITANI, Kazuya YAMASHITA Yoichiro FUKUZAWA, Motoko OKUNO, Yumi ITSUKA, Hiroyuki NAORA Kiyoko NAWATA and Kouichi SHIRAKAWA	129
The Promoting Activity: Care of Excretion and Eating with the Dignity: Shimane Women's Fund Aid Business Teruko ISHIBASHI, Miyuki KAJITANI, Ichie MATSUMOTO, Kenji HAYASHI Momoko ITSUKA, Satoko AIKA and Maki KATO	135
The Connection between Modern Physics and Jung's Psychology: The Implicate Order and the Collective Unconsciousness Hiromichi EZUMI and Yuichi IZUKA	143